

日本人の友達の家遊びに行く、玄関の前で家族の人数より、傘の数がずっと多いことに違和感を抱いた。韓国では、傘が比較的に高価で、一人一本しか持っていないからだ。

かつて、日本では、韓国と中国のように農業による生活が中心で、四季の変化を把握することが大切だった。そのため、韓・中・日では、四季にかかわる諺や言葉それぞれに特徴がある。

日本に初めて留学をして日本語を学び「遣らずの雨」という言葉を覚えた時、なぜ韓国語にはない雨に関する言葉が多いのかわかると思った。

遣らずの雨ばかりか、五月雨（さみだれ）、時雨（しぐれ）のほかにも、長い間雨が降り続ける梅雨、にわか雨などがある。やはり日本ならではの気候で生まれた言葉であろう。韓国では、家族の数以上に傘を置いていないが、日本の家庭は住んでいる人数より、



なぜ何本も傘を持つ？

多くの傘を置いている。それは自分の家に訪れた客が、帰る際に、雨にぬれないように傘などを貸す気配りの習慣がある。

【ユン・テンク】

初めて日本のコンビニに入った時、一般雑誌と漫画の横に成人向け雑誌が置いてあることに驚かされた。これは中国出身の留学生から見て不思議に見えた。日本のコンビニでは「成人向け」と言いながらも、その横で子供向けコミックスを陳列している店も珍しくはない。しかし、成人雑誌は「18歳未満禁止本」とも呼ばれ、若い少年らの目の届かない場所で販売すべきだろう。

コンビニに入って、買い物をする時、子供たちが成人雑誌コーナーのすぐ横に立って漫画を読んでいる姿をよく見かける。成人雑誌コーナーと近すぎて、未成年たちが手にとりやすく、悪影響を与えるおそれがある。

戸惑う成人雑誌の販売法



コンビニの成人向け雑誌コーナー

る。子供が買っていないかな、かなければよい。というなら、最初から置かない。店内では「未成年者の成長を妨げる」という理由で、成人雑誌の立ち読み、および購入はお断りさせていただきます」というアナウンスが流れる。もっと具体的な対策をとるべきだろう。例えば専用コーナーを作るのなら、床面にラインを引き、「未成年者立ち入り禁止ゾーン」を作ったほうがよい。

大阪府内では府条例で18歳未満の青年に対し、指定された「有害図書類」の販売・閲覧を禁止しており、成人雑誌にカバーをつけて販売する対策をとっている。何よりも子供に良好な環境を作ることが大事なのではないか。

【周沛琦】



日本で生活しているうと思議だった。と、よく「すみません」という言葉が耳に入る。例えば、エレベーターを出た時、他人に体を触られても、自分から先に頭を下げたり、レストランでウェイターを呼ぶ時も「すみません」を言ったりする。電車の中でお年寄りに席を譲った「すみません」と言ってくれる人も多くいる。なぜ日本人は「ありがとう」というべき場合でも「すみません」を口にするのだろうか。

頻繁に聞く「すみません」

あり、間違えていなかったら、謝罪の言葉を口にしない。しかし、日本人が「すみません」とよく言う理由を理解できるようにになった。日本人は他人との関係を非常に重視しており、相手に迷惑をかけるないようにするという国民性に特徴があると思える。

あえて自分の非を認めるような言い方をして、人間関係を丸くおさめる。「すみません」という言葉はまさに思いやりで、潤滑油のような役割を持つのではないだろうか。

今、自分も日本語の諺にある「郷に入れば郷に従え」のように、よく謝るようになった。日本で生活をしているからには、この国の文化を認め合って、理解しながら人と付き合っていくことが大切である。

【馬立国】

多すぎる自動販売機

韓国から日本に住んでみると、なぜかこのように自動販売機を見ることが多い。自動販売機を置くスペースさえあれば、どこにでも設置することができ、自動販売機が多い理由の一つかもしれない。しかし、否定的な視線で眺める人も少なくない。電力の消費量を考えるとムダが多すぎる。日本の多くの自動販売機は、ほとんどが24時間作動し、冷暖房機能に加え、照明設備まで備えており、消費電力が大きい。東日本大震災と福島原発事故が発生した2011年直後に、東京都知事は電力不足を克服するためには、電気の消費量が高い自動販売機の稼働を中断しと要求していたこともあった。



街角の自動飲料販売機

自動販売機の販売会社は、今後、LEDを活用した自動販売機の普及を促進するという。日本の消費者も省エネルギーについて、もっと生活の中で考えるべきではないか。

【ナム・ユジョン】

編集後記

新学期に入っすぐ熊本地震が発生した。立て続けに震度7の揺れは、地震大国日本でもほとんどなかったことだ。留学生新聞を制作する今年のクラスは中国、韓国からの学生で、この地震を機会に、その被災体験を知り、今後母国の防災にどう生かすかを考えてもらうことにした。

中国の家電最大手が欧州のサッカーチームを買収する発表をしたり、韓国の電子会社が有機ELテレビ市場で9割を占めるなど、中韓企業の成長力は日本を上回りそうな勢いがある。しかし、そんな両

国の産業に大打撃を与えるかもしれない自然災害への備えは、日本に比べ、まだ遅れていると伝えられる。

やがて関学を巣立ち、世界に羽ばたくであろう留学生らは、取材を通じて、さまざまな体験をした。今回の紙面からは、得られたものの大きさが十分に読み取れ、手応えを感じた。

将来、留学生らが万一、危機に遭遇しても対処できる備えを身に付け、それぞれの社会に貢献してくれると信じている

【担当講師・平野幸夫】

